

＜メディアウオッチ＞ 見過ごせない 市民デモへの「逮捕」の脅し

上出 義樹

原発の廃止を求める素朴な願い

数基の原子炉が同時に危機的事態に陥った福島第一原発の事故が、原子力と文明社会そのものあり方を問う中で、これまで無縁だったデモに参加して原発への素朴な疑問をアピールする市民が増えている。ごく自然な行動だと思うのだが、公安警察はその「市民デモ」まで「反社会勢力」にしたらしい。

さまざまな理由を付けて、デモ参加者や、取材中のフリーランス記者らに「逮捕」の脅しをかけ、実際に逮捕者も出ている。「逮捕」されそうになったフリー記者と警官とのやり取りを後述するが、あまりに高圧的な警官の言動は、とても民主主義の国とは思えないほどだ。しかし、単に横暴なだけではない。「市民デモ」の背後には権力側の巧妙な「仕掛け」などがいろいろ見てとれる。大手メディアが報じないデモ取り締まりの舞台裏に光を当てた。

福島原発事故が起きて以来、原発政策の見直しや「廃止」「停止」を求める大小さまざまなデモ行進や抗議・要請行動は、全国各地で行われている。

東京電力や政府の関係省庁などによる福島原発事故の共同記者会見が毎夕、開かれる千代田区内幸町の東電本店前では、「自分にも何かできることがないか」と初めて参加した主婦らを含め数十人規模の「ろうそくデモ」を、筆者は何度か目にしている。ところが、こんなささやかな市民行動対しても、警察官がしっかりと警備に当たり、結構物々しい雰囲気だ。

警察は「シナリオ」を通り？ 混乱状態を演出

物々しいだけでなく、逮捕者が出るなどのトラブルがあったのは、5月7日に東京・渋谷を中心に開かれたデモ。高円寺のグループのツイッターなどを通じた呼びかけに応じて主催者発表で約1万5千人が参加し、「原発廃止」などを訴えた。翌日の朝日新聞社会面の記事は、楽器を演奏する若者や仮想グループなども多い「お祭りムード」のデモだったことを報じている。

ところが、この渋谷デモを取材した複数のフリーランス記者らによると、警察側の強引な隊列規制のほか、意図的な扇動者とみられる人物らの挑発的な行動もあって混乱状態が起き、すぐ釈放された者も含め4人の「逮捕者」が出たという。

見逃がせないのは、警察当局に最初から強引に理由を付け、適当な容疑で何人かの逮捕者を出す「シナリオ」ができていたフシがあることだ。たまたま、

筆者の知り合いのフリーランス記者2人が、危うくその「逮捕者」になりかけた。

そのうち1人は、デモの写真を撮っていると、横から来たヤクザ風の男に「オレの写真を勝手に撮った」と追いかけられ、あわてて逃げたところ、数人の私服警官がいきなり現れて取り押さえられた。いかにも、待ち構えていたような私服警官の出現だったが、「この人は取材しているだけ」とアピールしてくれたデモ参加者の助けで、何とか逮捕は免れたという。

フリーランス記者に職権乱用の言いがかり

もう1人の記者は、ガードレールに乗って撮影したところ警察官に注意され、「これは警告だ。今度は逮捕する」と言われて問答になった。デモの参加者ではなく取材者であることを説明したが、「社名を言えないなら認めない」と、フリーランス記者は取材として認められないような扱いをされ、ガードレールに腰かけたまま警察官と以下のようなやり取りをしたことをメールで伝えてきた。

記者 「ガードレールに腰をかけて逮捕する理由を説明して」

警察 「危険だから」

記者 「ガードレールに登ったのは悪かったから謝った。登ると危険だということも分かる。でも、腰掛けていて危険なことなんてない」

警察 「危険かどうかはこっちが決める」

記者 「危険ではないところで危険を理由に逮捕するなら不当逮捕で逆に訴えることもできる。危険である理由を言えないなら、警告は無視する」

警察 「本当に逮捕するぞ」

記者 「そもそも、何の法律で？」

警察 「道交法でガードレールの取り扱いが決まってる」

記者 「道交法の何条？」

警察 「何条かまでは今は分からない」

記者 「その道交法を破ると、逮捕できるってことだね？」

警察 「それから警察の警告を無視すれば、公務の執行を妨害したことになる」

記者 「だから、取材している人間がガードレールに腰掛けると、何でデモ警備をしている警官の公務を妨害することになるわけ？」

警察 「これ以上聞かないと、本当に逮捕するぞ」

記者 「だから理由を説明してよ」

本人は「ガードレールに上がるなど自分にも非があった」と、控えめに語るが、取材記者がこんなことで逮捕されてはたまったものでない。

大手メディアは権力の「マッチポンプ」に厳しい目を

警察と言えば近年、税金を流用した長年の裏金作りが全国で問題になったが、北海道警察などは多額の裏金対しても当初はしらを切り通した。また、警察を指揮する立場にある検察では、大阪地検の証拠改ざん事件が記憶に新しい。

権力機関の警察や検察は、自らの組織を守るためにはどんな手でも使い、自分たちの「シナリオ」通りに事を運ぼうとする体質が強い。

今回の市民デモでも、さまざまな仕掛けをした「計画逮捕」の構図が見え見えだ。その背景には、何が何でも逮捕者を出して「デモは反社会的なもの」との情報操作を行う狙いが浮かび上がる。まさに、国民に目を光らせる権力の本来的な仕事と言えるかもしれない。

さらに、警察の内情に詳しい記者らによると、警察当局は機動隊の予算確保のために、右翼に頼んで警備要請につながるようなそれらしい街宣行動をさせるなど、「マッチポンプ」の手もよく使うという。

国民からは見えにくいこうした「権力の日常業務」に対し、「権力の監視役」であるはずの新聞や放送は、もっと厳しい目を向けてほしい。

(かみで・よしき) 北海道新聞で東京支社政治経済部記者、シンガポール特派員、編集委員などを担当。現在フリーランス記者。上智大大学院(新聞学専攻)在学中。